

マザー・テレサのアイデンティティー —その模範の人間学的考察—

小林 宏子

マザー・テレサは、誰もが認める貧者救済の聖女である。しかし、その外面的な偉業の背後で、どのような霊性が生きられていたかを理解する人は少ない。キリスト教信仰を土台としていることは言うまでもないが、そこには、マザー・テレサに固有の召命があり、「神の愛の宣教者会」の創立者ならではの霊的試練の受諾と応答が含まれていたからである。そこで、本論は、マザー・テレサの人生に見られる人間学的模範を、アイデンティティー形成と自由の観点から考察する。修道会の創立者、また、初代総長という使命の中核にある「神の愛の宣教者」というアイデンティティーを、マザー・テレサはどのようにして貫徹したのであろうか。その人格形成の過程を、カトリック信仰の受容、また、神の呼びかけを受け、その招きに答える形で発揮される人間的自由の行使、更に、毎日の生活で繰り返されるアイデンティティーに忠実に留まる選択などに焦点を当てて論じてゆく。

1. はじめに

マザー・テレサ¹の生誕 100 周年を祝う今年も日本でも映画の上映会や特集番組の企画や催しが注目を集め²、改めて、彼女が現代社会に与える影響の大きさが確認された。執筆者の授業においても、マザー・テレサの活動や言葉に感銘を受ける学生は多い。それは、マザー・テレサがその修道会の名にふさわしく神の愛を伝えるからである。しかし、一方では、彼女と自分を比べ、「わたしにはできない」と初めから諦めの姿勢を示す学生もいる。確かにその活動はキリスト教的愛の徹底した実践であり、人が容易に真似のできることはない。また、執筆者が授業でマザー・テレサを取り上げる理由も、自分に同じことができるからでも、学生が同じことをすべきと考えるからでもない。むしろ、彼女の言葉と活動には人間業を超えた神の働きそのものが示されていると考えている。しかし、その神の業や愛を映し出す「神の愛の宣教者」という彼女のアイデンティティー確立の過程には、学生の人格

1. マザー・テレサは、本名をアグネス・ゴンジャ・ボジャジュといい、ロレット修道会時代にはシスター・テレサと呼ばれていた。本稿では、年代による呼称の区別をせず、マザー・テレサ、或いは、マザーとだけ表記する。

2. <http://www.motherteresa.co.jp/news.html> 参照。

形成に欠かせない人間学的課題としての自由の模範を認めることができると考えている。

通常、アイデンティティーは、個人の由来や所属に注目し、その中のどこ（何）に自己の同一性を実感できるかを探求する。しかし、執筆者は、人間が将来の目標として定める理想や使命を自覚する際に実感する自己規定の肯定感に注目する。それは、人間の自由は「使命という無時間（時間を超える永遠の次元）的な“至高”の価値と結ばれた超越（いま・ここを超える次元）的目的や目標を前提とする」³ 選択の中で発揮されると考えるからであり、マザー・テレサに模範を見出す理由もそこにある。

マザーはその活動を、自己実現を目指す個人的動機で始めたのでも、社会変革を目指す政治運動や貧民救済を目的とする福祉活動として行っていたのでもない。彼女は自分を神の鉛筆⁴と表現し、その活動が、神のイニシアティブによるイエス・キリストの働きであり、信仰や祈り無しには成しえないことを繰り返し語っていた⁵。その活動は純粋な宗教的動機⁶によって始められ、忠実に継続された修道者の礼拝行為⁷である。

そこで、本稿はマザー・テレサが自身を表現した言葉を手掛かりに、そのアイデンティティー確立に見られる人間学的模範を考察する。特に、生路決定の際に発揮される人間の自由の、自己を一定の方向に規定する働きに注目し、到達点となる目標の設定と吟味の重要性について論じる。更に、個人の自発性や能動性と理解される自由ばかりでなく、超越的存在との関わりを前提にした中で、所与の環境を受諾するか否かを決める選択や、現状とは別の領域へ踏み込むか否かを決定する、人間の自由意志における受動を踏まえた能動の働きを見直す。最後に、経済効果や科学技術の発展を優先する価値観の中で、いのちとしての人間の尊厳を実感できずに苦しむ若者たちに、使命の形で自覚されるアイデンティティーの発見と確立に向けた試練を引き受けることの意義を論じる。

II. 本論

II. 1. マザー・テレサのアイデンティティーの考察：最初の召命まで

II. 1. 1. 受動的要素の受容：生まれと国籍

ある時、マザー・テレサは自分のことをどう表現するかと質問され、次のように答えた。

3. 井上英治・片山はるひ「4自由-成熟と喪失、そしてあらたな成熟」『現代人間学』（春秋社、2008）71頁。

4. 写真・編訳片柳弘史『わたしはあなたを忘れない』（ドン・ボスコ社、2001）32頁。出典は1989年のTime誌によるインタビューとある。

5. マルコム・マゲリッジ著／沢田和夫訳、『マザー・テレサ-すばらしいことを神さまのために-』（女子パウロ会1976年）111頁。

6. 同上、108-9頁。

7. 写真・編訳片柳弘史『愛する子どもたちへ マザー・テレサの遺言』（ドン・ボスコ社、2001）、38頁。出典「1979年12月10日。オスロでのノーベル平和賞授賞式での講演」

“By blood, I am an Albanian. I am a citizen of India. I am a Catholic and a religious. By vocation, I belong to the whole world. But my heart belongs entirely to Jesus.”⁸

実に明解に表明されたこの言葉を自己規定の意味で考察する時、まず気づくのはその受動的要素の肯定的受諾である。すなわち、両親に由来するアルバニア人としての血筋を肯定する。マザー・テレサことアグネス・ゴンジャの両親はアルバニア人であるが、第一次世界大戦前はオスマン帝国領コソボ州・ユスキュプ、現代はマケドニア・旧ユーゴスラビア領スコピエと呼ばれるバルカン半島の都市に住んでいた。このような出自に関する事実は、個人の自由意志とは関わりのない次元で決定された事柄であるため、通常は受容するという形でのみ実感されるアイデンティティーである。しかし、マザーは、偶然の決定とされがちなこの事柄を「自分の国」を持たない人々や「知らない国」で暮らす移民の人々に共感し連帯するための経験と受け止める⁹。

次のインドの国籍については、神の愛の宣教者を設立し施設を所有する際にインド国籍を持っていることが必要となったために選択された所属である¹⁰。宣教師がすべて宣教国に帰化する訳ではないため、マザーの国籍は必要に応じて選択されたものと言えるが、その必要性もまた、インドの人々に献身する使命の中で意味を持つものとして受容された。

自分の意志や努力が発動する以前に、所与のものとしてすでにある環境を受諾するか否かを決める選択において、社会的弱者とされる他者との共感や連帯への招きが持つ意義を見直したいものである。

II. 1. 2. 被造物である人間性の肯定：カトリック信徒

マザー・テレサという名前には、すでに、彼女の宗教とその宗教内の身分が示されている。テレサとは、彼女がローマ・カトリック教会内の一修道会であるロレット修道会において、修道者として初誓願を立てた時につけられた名である¹¹。また、マザーとは、そのシスター・テレサが神の愛の宣教者会という別の修道会の創立者、及び、初代総長となった時から用いられた敬称である¹²。通常修道会に入会が認められるには、カトリックの洗礼を受けた信者としての信仰生活を3年程度実践していることが必要となる。マザーの場合、その信仰の始まりは彼女の意志による選択というより家族や教会共同体の生活を通して受容されたものであるが、彼女が18歳で修道者への道を自覚的に選ぶ段階では、カトリック信者であるこ

8. “Mother Teresa-Angel of God-”, Fr. Eugene Palumbo, S.D.B., Resurrection Press, 2000. p.76

9. 写真・編訳片柳弘史「自分の国」（アメリカの最高裁判所に宛てた手紙より）『聖なる者となりなさい—マザー・テレサの生き方—』（ドン・ボスコ社、2002）58頁。

10. 工藤裕美／シビル・ヴェリヤト『宣教師マザー・テレサの生涯』（上智大学出版、2007）13頁。

11. 同上、104頁。

12. 和田町子『マザー・テレサ』（清水書院、1994）79頁。

とは、彼女のアイデンティティーの一部であり、前提となっていた。その信仰によれば人間は神の被造物であり、この世界の管理を任された存在ではあっても、その所有者でも支配者でもない。また、人間が自分で自分は何者かを考え始める時には、何よりも神の愛の対象として肯定され祝福された存在であることが教えられる¹³。そうであればこそ、その祝福にふさわしい自己の生き方を、神の指導の下で、自らの理性で探究し、意志をもって選び、行いをもって実現することが課題となるのであり、家族や共同体によって教えられ励まされる必要が生じるのである。マザー・テレサの生涯を模範として見る時、このような宗教教育を通して、幼児期から人間の有限性や受動性を肯定的に受容する環境が与えられることが、後の人間的成長の土台を築く上で、どれほど貴重な体験となるかを考えさせられる。

なぜなら、現在は、技術上は人間の受精卵を検査し、個人が希望するタイプの人間を選別して誕生させることが可能となっている時代である。すでに生命の神秘のベールははがされ、科学技術を持つ人間こそが万能であると信じて、あらゆる可能性の実現を追求することが当然と考えられている。そのため人間の有限性を意識させる事柄を無意識に排斥する傾向がある。しかし、その技術発展の恩恵にあずかれる人の数は限定的であり、可能性に刺激された欲求に囚われる人々の個人主義的争いから生じる人類の苦しみは増すばかりである。このような時代では、宗教や信仰の教えはあたかも人間の自由を制約し社会の発展を妨害する厄介者のように扱われるが、それらが制約するのは実は、自由ではなく人間の欲望である。

人間の自由は「受動をふまえての能動」であり¹⁴、受動性による制約を無視するだけでは、人間は逆に、自由選択の結果による別の制約に拘束され、以前より不自由になることを知るだけである。むやみに制約からの解放だけを望むことは、人間性の成長にはつながらない。確かに、人間は成長の過程でそれまでの受動面に伴う制限や制約を束縛と感じるようになり、それら「からの解放」を望んで分離・独立の方向に進む。しかし、その独立は自由の一面に過ぎず、人間にはあらゆる制限・制約からの自由は不可能であり、能動も即受動となる事実を弁えるならば、分離・独立を実行する前に、その方向が目指す到達点を慎重に吟味することが肝要である¹⁵。

現代の幸福観は、より多くの欲求に満足をもたらす条件を備える万能人間を理想とするため、現実の自分に不全感を抱える若者たちの悩みは深刻化している。一度、現代の進歩が行きつく先の人間像を再考する必要があるのではないだろうか。有限性に苦しみを覚える人間の痛みは、その感受性を無視し、コンピューター制御の人工物の力を借りることで解決されるのだろうか。それとも、限界を抱えたままの状態を受容し、愛する他者との出会いにおいて解決されるのであろうか。

13. 創世記1章26－31節。

14. 井上英治・片山はるひ、前掲書、62－65頁。

15. 同上、68頁。

マザー・テレサに感動する心とは、愛の交わりから分離され、機械部品のように扱われる人間の、愛への渇きを反映しているのではないのか。その模範は、人間が愛し愛される関わりの実現をこそ求めていることを認め、その受動性と限界をまずは肯定し、非合理ではあっても実はより人間的であり得る超越的知恵に導かれる生き方の回復への招きではないのか。

II. 1. 3. 招きに応答する人間の自由：修道女

マザー・テレサの活動がどれほど注目されようとも、マザー自身は、自分たちがあくまでも修道女であることを強調していた¹⁶。カトリック教会では、一定の身分や職業を、神から委ねられた使命¹⁷として受け取ることを召命と呼ぶ。マザーの場合、修道女となる召命そのものは、インドへ派遣される機会を提供したロレット修道会への入会を選択した時に見られる。修道生活とはイエス・キリストへの愛のために、イエスと共に歩むことを願い、貞潔、清貧、従順という三つの誓願を通して自分の存在を神に捧げ、すべてを神の意志に従わせたイエスに一致して福音的勧告を実践することを目指す生き方である。

和田町子氏¹⁸はマザーの召命体験を解説する中で、召命という神の選びが人間の主体的選を束縛しないことを説明している。なぜなら、神の呼びかけに人間が自由に応えることで成立する関係は、「命令と服従」という強制的な関係ではないからである。召命は人間の側には断る自由も保証されている中で、一定の自己のあり方を主体的に選び取る行為である。そこに成立する「呼びかけと応え」の関係は、神の自由な意志表明に対して、人間の主体性が従順という形で自己の意志表明をする人格的關係である。この関わりは二つの意志の一致という愛を成立させ、応答する人間には喜びと充実が与えられる。こうして人間の自由は創造主である神の意志に自分の意志を一致させ、その働きに自己を委ねることで自己創造を実現する。修道者はキリストを模範として神に自己を捧げることで、キリストに似た者となることを喜びとする¹⁹。

マザーがその後の人生において多くの悲惨な現実を目撃しながらも、自分の召命を全うすることができたのは、この世界で味わう困窮や苦難の中にも、キリストに似た者となることを持つ愛の意義を確信していたからである。召命への応答は、人間の自由を抑圧するどころか人間の根源的希求とさえいえる「愛し愛される関わり」の実現の一形態であり、その中で人格的成長を遂げることが十分可能な人間的選択である。マザーの活動の外面的形態に注目するあまり、内面的動機である愛を見逃すことがないようにしたい。

「私たちの召命はイエス様のものです。貧しい人たちのために働くことはありません。

16. 工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、126頁。アンセルモ・マタイス『イエスを愛した女マザー・テレサ—「聖女」の真実』（現代書林、1997年）144—5頁。

17. 鈴木宣明「召命」『新カトリック大事典』上智学院新カトリック大事典編纂委員会編3巻（2002年、研究社）289頁。

18. 和田町子『マザー・テレサ』清水書院、1994年33—34、36頁。

19. マルコム・マゲリッジ、前掲書、126—8頁。

貧しい人たちのための働きは、行動に表した私たちの神への愛です²⁰の言葉にあるように、彼女たちが捧げようとしているのは活動よりもそこに込められた愛のほうである。つまり、マザーはロレット修道会で聖マリア学院の教師として働いていた時も、神の愛の宣教師会を創立して貧しい人のために働いていた時も、何にもましてイエスを優先し、イエスを愛し、神の意志にすべてを捧げる修道女というアイデンティティーを生きていたのである。マザーの召命への応答に現われる自由の模範は、外面に表れる職業ではなく²¹、神と世界に向かう時の根本的な心の態度や生き方の姿勢をどの方向に理想を定めて整えるのかという考察と選択を促している²²。

II. 2. マザー・テレサのアイデンティティーの考察：第二の召命

II. 2. 1. キリストの御心の啓示

マザー・テレサを「貧しい人々中の最も貧しい人々に仕える」活動に着手させた力は1946年9月10日に与えられたキリストからの啓示²³に源がある。その中でマザーはキリストに奉仕する新たな招きを受けた。キリストは、十字架上の「渴く」という言葉（ヨハネ19：28）と「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ25：40）という聖句に集約される願いを表明した²⁴。キリストはマザーに対し、インドで誰からも顧みられずに放置されている極貧の人々に奉仕し、その魂を救うために献身するインド人修道女による修道会を創立して欲しいと打ち明けられた²⁵。その内容に恐れをなし、すぐには承諾できずにいるマザーに、キリストは励ましを与えながらも熱心に要請を続け、その後も数カ月間にわたって語りかけた²⁶。マザーは聖母マリアに執り成しを願いながら熱心に祈り、最終的にはその招きに応える覚悟を決める²⁷。

当時、インドではイギリス植民地支配からの独立運動が激化し、暴動や紛争が多発していた。マザーへの啓示は、カルカッタでヒンズー教徒とイスラム教徒の対立紛争が、相互に虐殺し合う市民戦争に発展した事件後の間もない頃に起こった²⁸。マザーを使命へと招くキリストの言葉には、貧しい人々の状況に対する神の悲痛な思いが示されている。社会から見捨

20. ジャヤ・チャリハ&エドワード・レ・ジョリー編いなますみかこ訳『マザー・テレサ日々のことば』（女子パウロ会、2000）311頁。

21. 片柳弘史『聖なる者となりなさい』「贖いのみわざ」44頁。

22. 片柳弘史『マザー・テレサは生きているーカルカッタからの報告ー』（教友社、2010）188頁。工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、125頁。

23. 五十嵐薫『マザー・テレサの真実ーなぜ、「神の愛の宣教師会」をつくったのかー』（PHP研究所、2007）、145－148頁。工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、141－143頁。

24. 写真・編訳／片柳弘史『聖なる者となりなさい』、62頁。

25. 工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、128頁、340頁。

26. マルコム・マゲリッジ、前掲書、108頁。工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、341－2頁。

27. 工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、同上、342頁。

28. 同上、138頁。

てられた状態にある人々は、何よりもまず「キリストの貧しい人」であり、「キリストの兄弟姉妹」であることが強調される。それらの人々を救いたい一心で、キリストはその道具となって奉仕する修道女を求めていると訴えるのであるが、その使命の中には苦しむ事がはつきりと予告されていた²⁹。それは、キリストに対する徹底した信頼と、苦しみにひるむことのない愛を求める呼びかけであった。また、約 2000 年前のユダヤにおいて、社会から禁忌された人々にまで及ぶ、神の無償の愛を宣べ伝えて奉仕したために、却って、権力者層から排斥されて十字架刑に処せられたイエスと同じ熱意を生きることへの招きでもあった。イエスは現代においても、人間が神の愛を受け入れ、互いにも愛し合うようになることを渴くほどの激しさをもって求めているのである³⁰。

カトリック教会では、救いを神のいのちにあずかる恵みと説明する³¹。そして、人格的存在である人間が「神の似姿」として創られた目的の一つは、三位一体の神との愛の交わりに招き入れられ、その関わりの中でいのちを分かち合うことであると教える³²。従って、人間として生まれながら愛を知らずに死んでゆく魂があることへの神の嘆きと、失意の中で失われる魂に奉仕する人々が存在することへの希みが、キリストの切実な願いとしてマザーに示されたのである。マザーはキリストの招きを受諾した。それが、自分にとって「召命の中の召命、第二の召命」であると悟ったからである³³。

II. 2. 2. 神の愛の宣教師会の創立

こうして、「最も貧しい人々の救いと聖化のために働くことによって、十字架上のイエスの愛と霊魂への限らない渴きを癒す」という目的を持った神の愛の宣教師会が創立された³⁴。マザーの活動方法は、即座に、どのような状態にある人であっても、キリストが命を賭けて愛した命として、また、キリスト自身として受け入れ、愛し仕えることに徹するというものである。マザー・テレサとシスターたちの奉仕の特徴は、キリスト自身に仕える時の真心と敬意を込めた態度にある。実に、この愛の籠った態度こそが、その奉仕を受けるすべての人々に自らが尊厳を持つ存在として受け入れられていることを実感させ、それまで抱えていた心の渴きを癒す救いとして作用した。単に物質的貧しさに喘ぐ人々ばかりでなく、先進技術文明の豊かさの中で孤立し人間の冷たさや無関心に苦しむ人々においても同様である。マザーの考えでは、人にその人自身の尊さを感じさせる唯一の方法は、喜びと尊敬に満ちた愛³⁵を

29. 同上、341 頁。

30. 和田町子、前掲書、165 頁。

31. 岩島忠彦「キリスト者の信仰」『カトリック教会の教え』（カトリック中央協議会、2003）105 頁。

32. 『人間の尊厳と科学技術』（教皇庁国際神学委員会著岩本潤一訳、カトリック中央協議会）22 頁。

33. マルコム・マゲリッジ、前掲書、107 頁。

34. 和田町子『マザーテレサ』78 - 79 頁、及び、奥村一郎「マザーテレサが遺したもの」『カトリック生活』（2003、12 月号）7 頁。

35. 和田町子、前掲書、113 頁、201 - 2 頁。

もって世話をする人々に会うことである³⁶。

マザーの活動はコルカタのモティジールというスラム街での奉仕に始まり、当初はインド国内に止まっていたが、1965年以降³⁷、マザーはその対象を人種・国籍・宗教・性別・年齢・職業・身分の区別なく広げ、必要ならば世界中のどこへでも出かけた³⁸。マザーにとっては、すべての人は神に愛されているかけがえのない子であり、人間が互いに愛する者となることに渴いているキリストが姿を変えて現れた人であった³⁹。そのため、マザーはすべての人を愛した。その愛はマザーと直接に出会う人が、自分こそマザーから世界中で一番愛されていると感じ、「神はあなたを愛している」という福音を確信するほどであった⁴⁰。それは、マザーがどれだけたくさんの人々の訪問を受けるとしても、一人一人と出会っているその時には、目の前にいる人だけが自分にとってのすべてとなるように、その全存在を差し出して人を迎え入れていたからである⁴¹。マザーその人が「あなたはこの世界に望まれて生まれてきた大切な人です」という福音の言葉となって神の愛を伝えていた⁴²。

II. 2. 3. 世界の中にあって礼拝者として生きる

しかし、なぜ、このようなことが成し得るのであろうか。マザーは、その秘密は祈りであると言う⁴³。また、その祈りとはキリストに自分のすべてを差し出し、自身を完全にゆだねること、また、キリストと完全に一つになることである⁴⁴。朝4時半の起床に始まり、5時から7時の朝食までの時間に、朝の祈り、黙想、ミサを行う⁴⁵。個人的祈りや共同でのミサを通してキリストに結ばれることが、活動の原動力である⁴⁶。

キリストが自分の中で祈り、働き、愛するようになることを望み、完全に自分をキリストに明け渡すことを祈る⁴⁷。自分の内にキリストを宿らせ、キリストが自分の中で自由に働かれるのに任せるならば、わたしたちは24時間、飢える人の中で、裸の人の中で、家のない人の中で、望まれず愛されず世話をされることのない人の中でも、キリストと共にいることができる⁴⁸。そ

36. 同上、120頁。

37. 工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、221頁。

38. マルコム・マゲリッジ、前掲書、78頁。ジャヤ・チャリハ&エドワード・ジョリー編『マザー・テレサ日々のことば』（女子パウロ会、2000）123頁。片柳弘史『聖なる者とならなさい』26頁。

39. キャサリン・スピック著・新島典子訳『マザー・テレサ』（近代文芸社、1997）、150頁。マルコム・マゲリッジ、前掲書、142頁。

40. 片柳弘史「マザー・テレサ—ほほ笑みの宣教師—」『福音宣教』オリエンズ宗教研究所、2010年8・9月号、33頁。

41. 同上、33—34頁。

42. 日本FEBC特別番組「マザー・テレサ生誕100年記念番組」2010年10月29日放送の片柳弘史講演「マザーの見つめた闇、そして光」。

43. マザー・テレサ／ブラザー・ロジェ『祈り—信頼の源へ—』（サン・パウロ、1994）30—31頁。

44. 同上、18頁。

45. 工藤裕美／シリル・ヴェリヤト、前掲書、191頁。

46. マルコム・マゲリッジ、前掲書、129頁。

47. マザー・テレサ／ブラザー・ロジェ、前掲書、16頁。片柳弘史『愛する子どもたちへ—マザー・テレサの遺言』54頁。

48. マザー・テレサ／ブラザー・ロジェ、同上17頁。

して「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20) 言えるほどにキリストに一致して活動に向かう時、同時に「わたしの兄弟のもっとも小さい者にしたのは、すなわちわたしにしたのである」という言葉によって報われる。マザーは、「私は毎日ご聖体を二度いただきます。一つはまずミサ聖祭のときイエス様のご聖体をいただきます。もう一つは道端に捨てられた貧しい人々をいただきます。その人たちは、私にとってもう一つのご聖体ですから。」⁴⁹「わたしたちはソーシャル・ワーカーではないのです。人々の目からは、わたしたちはソーシャル・ワークをしているように見えるでしょう。しかし、わたしたちは世界のただなかにありながら真の観想者なのです。わたしたちは二十四時間キリストの体に触れているからです。」⁵⁰の言葉の通り、日々、深くキリストと一致して生きていた。マザー・テレサが自分は「召命によって全世界に属する」と言う時、自分の存在はキリストの手足となって、全世界の人々に神の愛を仲介する者であるという意味である。

II. 3. 目標としての「十字架上のキリストとの一致」

II. 3. 1. 「霊的闇」への招きと受容

マザー・テレサの列福調査の中で明らかになり世界の人々を驚かせたことは、マザー・テレサがスラム街での活動を始めて間もない頃から、イエスの存在や神の愛が全く感じられないという「霊的闇⁵¹」を体験していたという事実である。しかも、その霊的闇は約50年という活動の全期間に及んでいた⁵²。

1946年9月10日にダーズリンへ向かう列車の中での最初の啓示からの数カ月間は、キリストからの招きを直接に体験できる霊的な蜜月ともいえる期間であった。しかし、ロレット修道会を離れて単独活動に入り修道会創立の動きが始まる1949年頃からは、一転してイエスの現存は影を潜め、マザーの心は闇の中に完全に見捨てられた状態になった⁵³。教皇庁の認可を受けた修道会が発展する一方で、マザーの内的苦しみと混乱は解決されないまま、初めの10年を過ごした。その間はイエスが自分を見捨てるはずがない、いつか再び恵みの時が訪れるだろうという盲目的な信仰だけで過ごしていた⁵⁴。しかし、1959年春には、そ

49. 奥村一郎「マザー・テレサの遺したもの」7頁。

50. 片柳弘史『愛する子どもたちへ マザー・テレサの遺言』38頁。

51. 人間の心の内奥に起こる霊的状态を、イグナチオ・デ・ロヨラは『霊操』の中で、「慰め」と「荒み」に分けて解説する。著者は、マザー・テレサが味わった「霊的闇」を、霊操における「荒み」として理解している。『霊操』イグナチオ・デ・ロヨラ著/門脇佳吉訳・解説(岩波文庫、1995年)263頁317番。

52. 工藤裕美「マザー・テレサの生涯—幸いと暗夜」2008年上智大学神学部夏期神学講座講習会講演集『キリスト教の原点を見つめて：イエス・キリストの「幸福」』光延一郎編(サン・パウロ、2010)318頁、『TIME』[Her Agony] (The Secret Life of Mother Teresa) Vol.170, No.9, 2007, 26-33頁。

53. 片柳弘史講演「マザーの見つめた闇、そして光」より。

54. 片柳弘史「マザー・テレサ—ほほ笑みの宣教師—」37頁。工藤裕美「マザー・テレサの生涯—幸いと暗夜」339-340頁。

れまで必死で抜け出ることだけを願っていた暗闇に自ら留まることが、イエスの苦しみを和らげることになることを理解し、暗夜を使命として受け入れる覚悟をするようになる⁵⁵。更に、1961年から指導にあたったノイナー師は、イエスを感じるだけでイエスの現存の証拠となるのではなく、むしろ、彼女が虚無感を抱え神に渴望していることこそが、隠れたイエスの現存の確かな証しであると悟らせた。彼女がイエスの不在に苦しむことは、キリストの贖いの業の霊的な部分に参加する彼女の使命であるというのだ。つまり、その霊的な苦しみを、十字架上で「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」（マルコ 15：34）と叫ばれたイエスの「遺棄の状態」に同化することへの招きと受け止め、同時に、霊的・内面的に神から見捨てられたと感じて苦しむ人々の心の渇きに共感し、分かち合うために捧げる犠牲とするのである。このキリストの贖いの業を現在にもたらすという使命を理解した後、マザーは自身の心の闇を愛するようになった⁵⁶。

II. 3. 2. 心まで完全にキリストのもの

キリスト教ではキリストと共に苦しむことはそのアイデンティティーを危機に晒すものではなく、むしろ、アイデンティティーの一部である。それは苦しみのものに価値があるからではない。そうではなく、他者への共感や愛、そして信仰のために担われる苦しみには救いの力があると信じるからである。神の愛の宣教者会における清貧の誓願は徹底しておりその具体的生活は厳しい⁵⁷。それは極貧の人々の欠乏を共に味わい、連帯し共感することを積極的に選ぶからである。その上、マザーにおいては霊的・内的渇きをも担い、今もこの世界で贖いの業を続けたいキリストにその存在の具現化する場を提供しようとする⁵⁸。マザーという存在において、人類のためにすべてを捧げたキリストの愛が、人々にとって体験可能なものとなるために、マザーは自分のすべてがキリストのものとなることを望んだ。マザーはシスターたちに次のように語った。

「あなた方は入会したまさに翌日に突然、すべてが嘘で無意味で空しいと感じるかもしれません。そんなときはイエス様にこう祈りなさい。私を切り刻んでくださって構いません。しかし、切り刻まれたすべての肉片はあなたのものです」⁵⁹。

ただし、このような召命を実際に生きることは簡単ではない。自己を捨てるということはいかなるレベルにおいてであれ、恐怖や苦しみを伴うからである。イエス自身も、受難に向

55. 工藤裕美、同上、342－3頁。

56. 片柳弘史「マザー・テレサーほほ笑みの宣教者」37頁。

57. マルコム・マゲリッジ著、前掲書、119－120頁、125－128頁。

58. 片柳弘史「マザー・テレサーほほ笑みの宣教者」37頁。

59. 工藤裕美「マザー・テレサの生涯－幸いと暗夜」317頁。

かう前には血の汗を流すほどの苦悩を体験し、何度も祈ることで乗り越える必要があった⁶⁰。しかし、マザーは何よりも真心を捧げようとした。自分を空にして透明になり、自分には何も残さず、自分はただ神の愛のすべてがそのまま人々に届くための道具となることを受け入れた。そして、人々にも犠牲を伴う愛を生きることの価値を語り⁶¹、痛むまで与える愛を実践するように勧めたのである⁶²。自分の渇きは癒されなくても、神の愛を感じて喜ぶ人と共に喜ぶことを自分の喜びとするキリストの心を生きるためである。苦しむ心そのままを捧げきっていたマザーは、「心においては完全にキリストのもの」と言うことができたのである。

II. 3. 3. 〈あなたはわたしである〉ということ

マザー・テレサの活動は、上から見下す憐れみや同情からの奉仕ではなく、人間存在そのものの本来の価値のための献身であると言われる⁶³。その理由を A. マタイス氏は、マザー・テレサが貧しさの中で飢え渴く人を「自身の半身」としていたからであると説明する⁶⁴。そして、この「あなたはわたしの半身である」という共感に基づく愛は、人間となった神の子イエスの贖いの業の理解に欠かせない。柳田敏洋氏は、十字架刑死を遂げるイエスを「相手になりきる神」の愛の現われとして説明する⁶⁵。イエスが十字架上で自ら渴く者となったのは、人間と同じ目に遭い、同じ体験をすることで、相手の苦しみの中に入って、その苦しみを担おうとする神の愛の体现である⁶⁶。十字架上で愛に渴くキリスト。それは、存在の根源において愛に渴く人間本来の姿を示している。雨宮慧氏は、人間の渇きは、ただ、神に向かって自己を開くことによって解決すると語る⁶⁷。しかし、人間のエゴイズムは弱く傷つきやすい自己を否定し、力と富を背景にして自己を誇る「何者か」になろうとする⁶⁸。この自己顯示と支配を希求する傾きは際限のない所有欲となって弱者からの奪取や搾取を繰り返すため、やがてそこには闘争と殺戮の世界が出現する⁶⁹。そのような世界のただ中で、人間になり代わって神から新たに注がれる愛といのちに完全に委ね、「無」となることを引き受けた人がキリストである。脆さを抱え、存在の根源で渇き苦しむ人間を自分自身とした神の連帯

60. マルコによる福音書 14 : 32 - 42。マルコム・マッゲリッジ著、前掲書、85 頁。

61. マルコム・マッゲリッジ、同上、87 頁。

62. ルシンダ・ヴァーディ編猪熊弘子訳『マザー・テレサ語る』(早川書房、1997) 65 頁。84 頁。

63. 和田町子、『マザー・テレサ』128 - 9 頁。180 - 1 頁。

64. アンセルモ・マタイス、前掲書、33 頁。55 頁。121 - 124 頁。

65. 柳田敏洋『日常で神とひびく』(ドン・ポスコ社、2006) 89 - 90 頁。

66. 同上、90、92 頁。

67. 雨宮慧『旧約聖書のこころ』(女子パウロ会、1989) 110 - 112 頁。神に触れたネフェシュだけが充足を知る。他『福音宣教』2007 年 4 月号 40 頁。

68. 創世記 2 : 7 「土 (アダマ) の塵 (アーファール) で人 (アダム) を形づくり」のアーファールとは、弱さ、儂さを意味する。また、3 章に描かれる原罪とは、神との関わりを無視し、自力で神になろうとする人間の心の不従順を描く。

69. 創世記 4 章のカインのアベル殺害に始まる人類の罪の連鎖は、一定の攻撃に対して殲滅をもって報復する人物の登場をもたらす。

によって、人間には、その渇きにおいて神との出会いを果たし、神とひとつになることが可能になった⁷⁰。そして、そのキリストの心に徹底的に一致することで、現代世界にキリストを甦らせた人がマザー・テレサである。自分の心はすっかりキリストのものであると言うことができたマザーは、常に、キリストに倣い「無」となることを受け入れる自己放棄と従順を選び続けていた⁷¹。

II. 3. 4. マザー・テレサの模範

ここで、再び、外面的模倣に囚われることのないよう注意を促したい。神の愛の宣教者会が誓約する実際の貧しさや、徹底した謙遜を生きる生活は召命があってこそ可能なことである⁷²。イグナチオ・デ・ロヨラによる霊的訓練の指導書『靈操』によれば、確かにすべてのキリスト者は「日々、自分の十字架を背負って生きる⁷³」ことを福音的勧告として受け取り精進すべきではあるが、実際の貧しさに導かれるかどうかは、神の自由な選びに属することである⁷⁴。イグナチオの指導は、召命を祈り求める場合の一定条件を記す。まず「神聖な威厳に満ちた方」がそのように現実的貧しさの中で奉仕させようと思われ、その人を選び、受け入れることを望まれる場合という限定がある。また、人々にも罪を犯させず、本人が「神聖な威厳に満ちた方」の御旨に背かず堪えてゆけるなら、という条件が示されている。そして、イグナチオはこの恵みを願う心を準備させるための祈りを、まず聖母マリアに、次に御子に、その次に御父にと、三段階に分けて行うよう指示するほど慎重である。

確かに、福音的勧告を生きようとするキリスト者の理想は、「自分を無にし、十字架の死に至るまで神に従順を尽くした」（フィリピ 2:6-8）キリストに最後まで追従することである。しかし、門脇佳吉氏は、時として霊的に熱心な人ほど自分の内的動機に注意を払わず、勇敢な決心の裏に強烈なエゴイズムを隠している場合があると解説する。つまり、理想像を設定する心の奥に功名心や名誉心という自己中心的な動機が入り込むからである。そこで神はわざわざ霊的な荒みを与えて魂を浄化し⁷⁵、すべての慰めや信心、完徳が神の賜物であり、人間は相変わらず「無」であることを悟るようにさせる。人間的限界や弱さは、人を謙虚にし、神に近づき恵みを体験して感謝する心を抱かせ、同時に他者の苦しみに共感して愛の奉仕に向かうという、神の恩寵が開花する場を準備するからである⁷⁶。

70. 高柳俊一編『神の福音に應える民』（LITHON社、1994）、森一弘「ヨハネ福音書における福音体験—出会いによる人間の救い—」20頁。小林稔「サマリアでのイエス—ヨハネ福音書四章1—42節—」217—8頁参照。

71. マルコム・マゲリッジ、前掲書、86—87頁。

72. ルシンダ・ヴァーディ、前掲書、113—115頁。

73. マルコ福音書8:34—35。

74. 『靈操』イグナチオ・デ・ロヨラ著/門脇佳吉訳・解説（岩波文庫、1995）155頁147番。158頁156番、166—7頁167—8番。

75. 同上、150—151頁、136番解説。

76. 同上、267—268頁322番。264頁318番。265頁319番。266頁。

II. 4. マザー・テレサの模範の人間学的考察

II. 4. 1. 超越と関わる人間性の肯定：受動を踏まえての能動

マザー・テレサの生涯をアイデンティティーの確立の模範として見る場合、人間存在を超越的・根源的次元をも含めた視野で眺め、その存在そのものがすでに有している価値を肯定的に受容する信仰を持っていたことの重要性に気づく。マザーのアイデンティティーを構成する様々な要素は、常にこの信仰を土台とする神との関わりの中で見出され、実現したものである。もし、神という用語に抵抗を覚えるならば、至高の価値、或いは、「人間を超えたところ（超越）」と結ばれた意義と考えてもよい⁷⁷。いずれにせよ、マザーの心は幼少時から、この世に限定された理想の自分ではなく、人間を超えた次元と関わる人生を生きることへと向けられていた。また、自分の使命を知るために霊的指導者と呼ばれる人の同伴を受けて祈り、超越からの招きを感受し、その招きに対して応答するか否かの選択の際にも祈り中で受ける内面的な励ましによって決断し、選択した事からの要請を受けて行動したのである。すべての過程には、受動を踏まえての能動という自由の働きが見える。しかも、その使命の実現は、日々の具体的生活における単調に繰り返される事柄の中に真心の愛を込めることの積み重ねであるから、毎日のすべての瞬間ごとに愛を込めるか否かを選択する自由が、生涯にわたり当人に残ることになる。従って、人間の自由とは一朝一夕に獲得できる資質ではない。まして、アイデンティティーの探求を始める前に、「自分自身の心の中で最善と認めるものに恥じない生き方⁷⁸をする」という自由意志における根本選択がなされていないならば、その生路選択の基準を何に見出すことができるであろうか。ただし、マザーにおいても、18歳でロレット会への入会を決めた選択を、単独で成し得た訳ではない。彼女の心に自覚された「宣教師になってインドで働きたい」という望みは、教会の主任司祭であったイエズス会司祭の影響を受けて⁷⁹生じたものである。人間は多くの「偶然」と思われる出会いから、やがては「必然」と認識することになる選択を行う。しかし、このように人間の自由が、受動を踏まえての能動において発揮されるからこそ、受動的影響の中から何を肯定的に受容し、何を否定してそこからの分離を図るかについては慎重な識別のための基準が必要になる⁸⁰。

II. 4. 2. 全人格的関心としての理想像

キリスト教の人間観は、人間を「神の似姿」に創られた人格的存在として捉え、その究極の目的を愛である神の交わりに参与することに置く。そして、神は、その似姿の完全な像と

77. クラウス・リーゼンフーバー「“超越” 経験とその理解—宗教哲学的アプローチ」〔上智大学のこころ—ソフィアの源泉とキリスト教ヒューマニズム—〕（上智大学、2009）73頁。

78. アルフォンス・デーケン「5 モラル—西洋倫理をふまえて」〔現代人間学〕90頁。

79. 工藤裕美「マザーテレサと5人のイエズス会員」『ソフィア』222号、第56巻2号、上智大学、2007、130—131頁。

80. レインホルド・ニーバーの祈りはこの意味で参考となる。God, Grant me the serenity, to accept the things I cannot change, the courage to change the things I can, and the wisdom to know the difference.

してイエス・キリストを啓示し⁸¹、人間がそのキリストを目指して歩み、キリストとの一致を通して神との交わりに入るように配慮されたと信じる。この信仰により、個人のこの世での生には、愛という関わりを生きるにふさわしい人格に向けて成熟するという課題が生じる。また、そのような愛の修養は、単なる「情動」に駆り立てられる活動の積み重ねではなく、理性と自由意志によって自己を一定の方向に規定し投入する「行動」によって実現される⁸²。もし、信仰という用語に問題を感じるならば、それを人間の「究極的関心」或いは、「あるもの（こと）に対する知・情・意のすべてを動員した全人格的関心」という定義に置き換えてもよい⁸³。また、究極的という質については、日常レベルでの関心が高められ、深められて、一人の人間の存在全体を賭けるレベルに達する関心と表現することもできよう⁸⁴。いずれにせよ、マザーは、イエス・キリストに似る者となることを自己の究極的目標としたのである。

マザーのこの目標選択は、現代の若者たちが常に活動していなければ不安に陥るという精神状態を抱え、短期間で人生に関わる決断を迫られる状況とは大きく異なる。マザーが人生の選択をした時代は、「全人的に統合された人格」を目指すための具体的なモデルを見出しやすい時代であったからである。従って、マザーを模範として提示するとしても、その外面的な活動の模倣を促すだけでは足りないのである。

マザーの言葉に感動し、人間の幸福を愛し愛される関わりを生きることによって定めらるれば、愛の条件となる人間的自由は活動の多さによってではなく潜心の深さによって養われることを理解する必要がある。マザーが独りになって沈黙の中で神に自己を完全に委ね、キリストの心に同化するための祈りを原動力としたように、理想とする像に意識を集中し、そこから力を汲み取ることが可能となるまでその場に留まる信念の強さや、一度定めた目標以外の方向へと逸らす誘惑となるものから敢然と離脱する精神力が求められるからである。理想として掲げた像の人格的統合についての吟味も必要である。

II. 4. 3. 根源的な渇きの自覚と対応

執筆者は、「自分探し」の迷路に陥る若者たちが求めている「本当の自分」とは、実は「自己肯定感」、或いは「ありのままの自分が、(自分にとって大切な)他者から受容されること」なのではないかと考えている。それは、人間学を受講する学生たちからのリアクション・ペーパーを通して、彼女たちの中にある「認められ、評価されることへの渇き」のようなものに気づくからである。しかし、彼女たち自身は、授業を通して心の中の根源的渇きを自覚するとしても、その渇きに対峙し、充足に向かうために取るべき具体的、かつ確実な方法を示さ

81. 教皇庁国際神学委員会『人間の尊厳と科学技術』（カトリック中央協議会）19頁。

82. E・フロム著／鈴木晶訳『愛するということ』（紀伊国屋書店、2007（17版）41－3頁。

83. 高山貞美「人間と宗教－キリスト教と仏教の対話に基づいて－」『上智大学のこころ－ソフィアの源泉とキリスト教ヒューマニズム－』（上智大学、2009）100頁。

84. 同上、100頁。

れてはいないため、所詮は解決不可能で厄介な課題と判断し、断念する場合が多い。速効性を重視する現実社会を見れば彼女たちの判断は正しい。彼女たちは遠い彼方からの、或いは、心の内奥からの招きに思いを馳せ、自分自身の内面のわずかな変化に呼びかけを見出すための時間的、精神的、経済的な余裕を持ってはいないと考えて当然だからである。しかし、宗教性、或いは霊性抜きで考える機械的人間観が一般化しつつある現代であればこそ、超越的存在の配慮の下にある自己を「絶対的に肯定」することが、ますます必要なのではないだろうか。マザーを模範として考えると、本来は出発点であるはずの自己受容や自己肯定という課題が、若者においては自己探求の目的と化しているように見える。そのため、彼女たちはあたかも、より多くの他者から受容される資質を備えた存在としてのアイドルや万能人間⁸⁵というイメージの中に「本当の自分」を追求する倒錯に陥っている。彼女たちは、まるで不特定多数の人々から注目され評価される時に味わう高揚感が、自分であることの実感であるかのように錯覚し、その高揚感をもたらさない現実の自分を嫌悪し、焦燥感や不安感を抱え込んでいる。ある者は虚無的になり大人の目には成長の恵みと映る事柄を拒否し、明らかに本人の将来に不利益が現れると予想される事柄を選択することが自由の証しであると思込む。しかし、それは単に「自らが自分の運命の決定者であるという自尊感情がもたらす高揚感⁸⁶」に過ぎない場合もある。人間の自由は本人を一定の方向に規定する選択として作用し、その結果は一回限りの人生に不可逆的な影響をもたらす。このことは、身近な代替物によって一時的な興奮状態や刹那的な充足感を得ることを、自己が抱える根源的渇きの癒しと取り違え繰り返すことで、逆に依存症的衝動に振り回される状態に陥ることと関係している。

そのような若者たちに対してマザー・テレサの模範が示唆するのは、自己の根源的な渇きと自覚的に直面し、神との関わりの中に充足を求めるという人間の宗教的可能性の一例である。更に、マザー・テレサが、全存在をかけて一致しようと努めた、十字架上で渇くキリストの姿は、渇きを抱えることが人間の本質的要素であり、否定する必要のないことと、たとえば、感覚的実感においてすぐに解決されないとしても、その渇きを抱えたままの人間が、神のまなざしの中で絶対的に肯定されていることを教えている。マザー・テレサの生涯はこの真理の証明ではないのか。キリストが命を賭けて挑み、多くの殉教者を始めとする無数の信者が長い歴史を通して追体験してきた、どのような人間も、神の目に尊い神の子であるという信仰の確信によって、自己存在の肯定感を得ることを現代社会は必要としていると思う。

成熟した人間の自由は、目的や価値が見出せれば困難が伴う事柄でさえ選択できるものである。神と結ばれた人間の心に生まれる何物にも左右されない深い自由や確信は⁸⁷、この世

85. マイケル・J・サンデル著／林芳紀・伊吹友秀訳『完全な人間を目指さなくてもよい理由—遺伝子操作とエンハンスメントの倫理—』（ナカニシヤ出版、2010）で議論されているように、現代は、人間の個人的資質に関わる遺伝子操作や身体強化改造が技術的に可能であり、生命の被贈与性が脅かされている時代である。

86. 内田樹「下流志向—学ばない子どもたち働かない若者たち—」講談社文庫、2009、141—142頁参照。

87. 柳田敏洋、前掲書、184—5頁。

の苦しみや虚しさを見ないことによってではなく、どのような状況にあらうとも「神が私たちを愛し、私たちと共におられる」という信頼の中に見出される安らぎである。マザー・テレサを模範と仰ぎながら、自己の内奥の渇きを世界で飢餓に苦しむ無数の人々との連帯・共感の中で受け止め、他者の必要を充たすために自己は「渇くままに留まる」という「痛むまでの愛」を、忍耐強い祈りを通して養い、実際の奉仕で培う *people for others, with others* の靈性を教育の中に回復したい。

III. 終わりに

執筆者は、アイデンティティーの確立という成長課題と向き合う時に、マザー・テレサのような超越的次元への開きを有する人格者をモデルとして想像できるか否かの違いは大きいと考える。本来、キリスト教的人間観に基づく人格形成において靈性の涵養は欠かせない要素であるが、無宗教を標榜する人が大多数と言われる日本社会では、宗教に関心事することを若者たちは憚る。また、西洋の宗教というイメージが拭えないキリスト教を受け入れ、その教えに基づいて人生を導く理念を構築する可能性も低い。従って、本学で学ぶ学生たちの多くも、科学技術の発展に伴って更に浸透しつつある唯物論的人間観の影響下で自他を評価しがちである。そこには、人間の意思を超えて躍動する「不思議ないのち」を宿している存在であることに対する敬意は失われ、複雑ではあっても最終的には人間に制御可能であるはずの有機物の一種であるかのような観点が伺える。そこで、確かな自己肯定感を希求する若者たちの発想も現世に限定されるため、思うままにならない人間的弱さを嘆き、能力の限界に苛立ち、競争心に駆り立てられて挑戦的になり、或いは、逆に自分の中に引きこもって破滅的になるといった悪循環の中で自分の居場所を定められずにいるように見える。

以前、神仏とは窮地に陥った者にとっての最後の砦であった。そのため、その砦の中の人間には、すべてのいのちを平等に受け入れ、無償でいつくしむ超越者の視点で自己を振り返り、新たな進路を見出すことが可能であった。しかし現在は、超越者の摂理を軽視する傾向が進み、すべてを人間個人の責任であるかのようにして押し付け合うため、人間界が弱肉強食の獣性を正当化しつつある。一方、やがては大量生産可能なロボットが家事をし、介護をし、おそらくは戦争もする時代の到来も予想される⁸⁸。

このような時代に、マザー・テレサの姿に理屈抜きで感動する若者の心は、すべての人が本来こうありたいと願う究極的な人間像に感応しているからではないのか。真に人間的な人間とは、どのような特徴を持つのかを再び、問いなおす必要があるだろう。マザー・テレサを模範として考察することは、一つの回答を提示することになるだろう。すなわち、自分を

88. 2010年10月17日(日)午後9時00分～9時49分NHK総合テレビ NHKスペシャル『貧者の兵器とロボット兵器―自爆将軍ハッカーの戦争―』<http://www.nhk.or.jp/special/onair/101017.ht>.

超えたところに自己を開き、かの次元からの呼びかけを受けて自分に固有の使命を見出し、その使命を自己のアイデンティティーの核として保ちつつ、人間的行動の特徴である共感や分かち合い⁸⁹を生きる人格である。また、使命の実現に伴う試練を受諾し、日々、アイデンティティーを選び続ける自由を实践した意義も大きい。「神の愛の宣教者」というアイデンティティーを貫徹したマザー・テレサに学び続けたい。

89. 北原隆「1人間の由来」『現代人間学』（春秋社、2008）13頁。

